

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：小岩 広平（臨床心理学コース）

<p>■ 研究題目</p>
<p>「空気を読めない人」への対処行動の選択—相手への親密さ・友人への感情・セルフモニタリング傾向に着目して—</p>
<p>■ 研究代表者・分担者 氏名</p>
<p>小岩広平（臨床心理学コース）（研究代表者） 小松眞峰（臨床心理学コース）</p>
<p>■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）</p>
<p>問題と目的</p> <p>地域社会の崩壊やネットメディアの普及による親密圏の変容は、現代青年の友人関係に不安定さをもたらしている（土井，2014）。流動化や不安の高まりに伴い、現代青年の友人関係は変容をとげている。岡田（2007a）では、それぞれの得点の高さから、現代青年の友人関係を分類した。その結果、伝統的な友人関係である「個別関係群」のほかに、現代的な友人関係として「群れ志向群」と「関係回避群」があることを明らかにした。さらに、社会の流動化やそれに伴う友人関係の不安定化により、現代青年の友人関係において重視されるようになったのが「空気」の読み合いである。</p> <p>従来の研究をもとに、本研究では「空気」を「その場にいる人々に望まれているかどうかを基準とした、その場面でのふるまいの規範」と定義している。また、Bateson（1972）のモード理論と大石（2009）をふまえると、「周囲のコミュニケーション・モードに合わせることに失敗した場面」を「空気を読むことを失敗した場面」としてとらえられているといえる。友人間での「空気」の影響力が強まっている一方で、うまく「空気」を読むことができない人物に対する攻撃行動が、学校現場において問題となりつつある。内藤（2009）は、いじめにつながる秩序として「空気」に着目した。さらに堀（2015）は、「空気」を読めなかった者が叱責され、徹底的に排除される危険性を指摘している。</p> <p>これまでの議論のように、現代青年の友人関係においてお互いに空気を読み合うことが重視されており、空気を読むことに失敗した場面で攻撃行動が生じてしまう危険性が指摘されている。しかしながら、従来の研究において、空気を読めない言動への対処行動に関する知見は不足しており、対処行動に影響を与える要因についての検討は行われ</p>

ていない。上述した問題について検討するため、本研究では空気を読めない言動への対処行動を分類する。また、空気を読めない言動への対処行動に影響を与える要因として、友人関係を取り上げる。具体的には、岡田（2007b）の友人関係尺度を用い、友人関係を類型化した上で、友人関係による対処行動の変化を明らかにする。

方法

調査対象は日本の大学生 226 名（男性 143 名、女性 82 名、年齢無回答 1 名、 $M=19.32$, $SD=0.88$ ）であった。回答者には、高校時代の「仲良しグループ」の想起を求め、その友人たちとの当時の関係性を測定した。また、「仲良しグループ」のメンバーの一人が空気を読むことに失敗した場面を四つ提示し、その場合に行うであろう対処行動を測定した。

質問紙の構成

友人関係尺度 岡田（2007a）が作成した尺度であり、現代青年の友人関係や距離の取り方を測定するために作成されたものである。本研究では、高校時代の「仲良しグループ」を想定して回答を求めた。

場面の設定 Bateson（1972）のコミュニケーション・モード理論を基盤とし、大石（2009）をもとに場面を作成した。具体的には、「まじめ」モードの失敗（Aさんが一人だけ楽しそうな場面・Aさんが話をきちんと聞かない場面）と「遊び」のモードの失敗（Aさんのノリが悪い場面、Aさんがしらけさせた場面）の4つの場面を作成した。

空気を読めない言動への対処行動 大石（2009）をもとに、14項目を設定した。

結果

空気を読めない言動への対処行動を分類するため、最尤法・プロマックス回転を用いて因子分析を行った。対処行動の分類において、4因子が抽出された。抽出された因子は、「放置」「叱責」「いじり・からかい」「フォロー」の四つに分類された。クロンバックの α 係数は、「放置」が $\alpha=.914$ 、「叱責」が $\alpha=.887$ 、「いじり・からかい」が $\alpha=.887$ 、「フォロー」が $\alpha=.861$ であった。それぞれの因子は、 α 係数が.85以上であるため、十分な信頼性が確保されているといえる。

友人集団との関係性と求められているコミュニケーション・モードが空気を読めない言動への対処行動に与える影響を明らかにするため、空気を読めない言動への反応を従属変数、コミュニケーション・モードの種類と友人関係を独立変数として、それぞれ二要因分散分析を行った。「放置」を従属変数とした結果、友人関係の主効果がみられた（ $F(2, 191) = 5.23, p < .01$ ）。多重比較の結果、群れ志向群（ $M=9.87$ ）よりも、個別関係群（ $M=12.10$ ）のほうが、「放置」の得点は高いことが示された（ $t=3.26, p < .01$ ）。また、コミュニケーション・モードの主効果もみられており（ $F(2, 191) = 69.26, p < .01$ ）

遊びモードを求められた場面 ($M=9.86$) よりも、「まじめ」モードを求められた場面 ($M=12.13$) のほうが「放置」の得点が有意に高いことが示された。

さらに、「いじり・からかい」を従属変数として分散分析を行った結果、友人関係の主効果がみられた ($F(2, 191) = 6.30, p < .01$)。多重比較の結果、個別関係群 ($M=9.61$) と関係回避群 ($M=9.70$) よりも、群れ志向群 ($M=10.90$) のほうが、「いじり・からかい」得点がそれぞれ高いことが示された ($t=2.91, p < .01$; $t=2.92, p < .01$)。

考察

因子分析を用いて空気を読めない言動への対処行動を分類した結果、「放置」「叱責」「いじり・からかい」「フォロー」に分類された。本研究において得られた4因子は、先行研究との類似点と相違点がみられている。吉野(1987)は葛藤への対処行動を、「強硬型」「柔軟型」「放置型」の三つに分類しているが、本研究における「叱責」は、葛藤を表面化させている点で吉野(1987)の「強硬型」と類似している。また、本研究にみられたその他の対処行動と吉野(1987)を比較すると、「放置」は「放置型」と、「フォロー」と「柔軟型」にそれぞれ対応する。一方で、「いじり・からかい」は、吉野(1987)においてみられなかった対処行動である。このことについて、空気を読めない言動は、吉野(1987)が想定していた対人葛藤場面よりもあいまいな葛藤であるため、多義性をもたせながらも相手の言動を指摘する方法としてユーモアが用いられる可能性があると考えられる。

友人関係によって空気を読めない言動への対処行動が異なることが示された。まず、群れ志向群において、「放置」の得点が低く、「個別関係群」と「関係回避群」において「放置」得点が高いことが示された。この点について、集団としての友人関係の志向が関連する可能性がある。空気の読み合いは、集団での友人関係の維持に不可欠なコミュニケーションであり、空気を読めない言動は、集団での友人関係を揺るがすものである。そのため、集団としての友人関係を重視する群れ志向群では、空気を読めない言動を放置することが難しいと推察される。一方で、関係回避群や個別関係群では、空気を読めない言動による集団への影響を懸念しないため、放置が可能であると考えられる。

最後に、本研究に残された課題について述べる。一つ目は、友人関係が叱責得点を予測していない点である。叱責得点を高める要因としてはほかに、相手に抱く親密度や、対処行動を行う者のパーソナリティ、空気への態度などが考えられるため、それらの変数と叱責との関連を明らかにする必要がある。二つ目は、空気を読めない言動に遭遇した際の認知的・感情的な反応を扱っていない点である。空気を読めない言動に対する認知や感情と対処行動の関連を検討することで、いじめや排除の予防につながると考えられる。

引用文献

Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind*. NY: Ballantine.

(バイトソン, G. 佐藤 良明(訳)(2000). 精神の生態学 改訂第2版 新思索社)

土井 隆義 (2008). 友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル—— 筑摩書房

土井 隆義 (2014). メディアの変容——若者のケータイ・スマホ文化とキャラ的コミュニケーション—— 井上 俊(編) 現代文化を学ぶ人のために 全訂新版 (pp.98-111) 世界思想社

堀 裕嗣 (2015). スクールカーストの正体——キレイゴト抜きのいじめ対応—— 小学館

内藤 朝雄 (2009). いじめの構造——なぜ人が怪物になるのか—— 講談社

岡田 努 (2007a). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達に関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.

岡田 努 (2007b). 現代青年の心理学——若者の心の虚像と実像—— 世界思想社

大石 千歳 (2009). 「空気が読めない」とはどういうことか?——社会的スキルの欠如という観点からの検討—— 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 44, 87-96.

吉野 絹子 (1987). 対人的葛藤の解決過程の分析(1)——葛藤に対する反応パターンとその類型化—— 社会心理学研究, 2, 35-44.